週刊
明るい小矢部
赤旗 読者通信 改題
2019. 4.14
通巻No.1418
日本共産党
小矢部市委員会
市内七社 245
Tel 67-4322
Fax 67-4842

何でも
ご相談を

市議会議員
砂田喜昭
TEL 67-4322

参議院議員
井上哲士

参議院議員
たけだ良介

衆議院議員
藤野保史

衆議院議員
笠井あきら

禁無断転載
複写配布

ポーランド・アウシュビッツ見聞記

谷口恭子

ポーランド・ツアーに参加し、アウシュビッツで貴重な経験をされた市内の方に、その訪問記を寄せてもらいました。

「ポーランド」という国

西側にはドイツ、東側には旧ソ連圏」の国々にはさまれていました。

1939年9月にナチス・ドイツから宣戦布告なしで侵略されたポーランド、独ソ不可侵条約の密約で東側からソ連軍も侵攻し、抹殺されました。今回、実際に足を踏み入れ、現地の方の話や風土、土地の様子から、大変な苦労や悲惨な体験をしてきた国であることを実感しました。

ホロコースト」(大虐殺)のむしろ被害者なのに、その代表的な場所としての強制収容所 アウシュビッツ」が、ポーランドに存在していることと自体が、そのことを示しています。

アウシュビッツの場所はポーランド南部クラクフ市の西方63㎞にあります。ヨーロッパ各地から移送しやすい、隔離、隠蔽しやすいという理由でナチス親衛隊が選んだ土地でした。かつて、ポーランド王国の王都だったクラクフ市は、ウィーンと双壁をなした中世最大の文化都市、日本で言えば「京都」的な存在です。

「非常識」な「常識その1」 アウシュビッツの地名

アウシュビッツ」というのはドイツ語名で、本当のポーランド語地名は、オシフィエンチム市」。

世界遺産 アウシュビッツ強制収容所」として登録され、ポーランド人が作ったかのような印象を与える」というポーランド政府の要請で、アウシュビッツ・ビルケナウ ナチスドイツの強制絶滅収容所」に改名された。

「非常識」な「常識その2」 ユダヤ人とは

ユダヤ人」という人種、血統的な民族があるわけではない。ユダヤ教を信じる人、ユダヤ人を母にもつ人の集団である。アンネの日記」の著者アンネ・フランクも、自分自身がユダヤ人だとは思っていなかったのではないかと、現地のガイドさんが言っていました。

収容所へ貨車を入れる引き込み線

『強制収容所のバイオリニスト』の編者との交流

アウシュビッツを生き延びたヘレナ・ドゥニチ・ニヴィンスカさんというポーランドの女性（昨年102歳で亡くなった)の回想録があります。『強制収容所のバイオリニスト――ビルケナウ女性音楽隊員の回想』(田村和子・訳 新日本出版社)です。この出版に関わった方との交流がありました。以下の話は、ヘレナさんの聞き取りに当たったアウシュビッツガイドであるレナータさんの話。

アウシュビッツでの蛮行の証拠は、ドイツによって破壊隠滅され、ソ連が戦利品として持ち帰ったので、資料として残っているのは5～10％にも満たない。生還者の口から語るしかない。著者のヘレナさんは90歳を過ぎてから話し始めた。夫にも話さなかった体験を残しておくのが役目と考えたからだ。初めは、余りにも悲劇的であり、収容所内でバイオリンができたことで生き残れたことを恥と考えて、文章化もだめと言っていたが、最終的には日本語版の本を手にして驚きと喜びを表していた。

アウシュビッツの収容所の説明するガイドのレナータさん（右端）

家畜用の貨車に70人余りを乗せ、3,4日間、水も食料もなく、糞尿にまみれて移送された。

回想録から

『…味わった衝撃の度合いがあまりにも大きくて、わたしの記憶に永遠に残ったことといえば、それは屈辱であり，人間としての尊厳をはぎ取られた感情であり、わたしたちの苦難を黙って見ていた人々とその苦難を引き起こした張本人に対する麻痺的な恐怖と反感であり、さらにそんな運命をもたらしたのがヨーロッパの文化的民族を代表するエリート出身者だったという驚きです。』

ツアー参加者の感想

「人間として恥ずかしい」
収容所にかかわった親衛隊員、誰一人反省しない

同じ人間が、こんな蛮行を平然とできることに、初めて 大間であること」を恥ずかしいと思った。戦後、収容所に関わった親衛隊8000人のうち、1000人が裁判にかけられ、1人も反省の弁をのべなかったそうだ。正式な 民主主義」の手続きの上にできた政権の方針に従っただけと。核兵器も同じですが、自分で自分の存在を否定し、競ってその否定手段を作り拡大し、殺し合いを人類レベルで2回も行い、かつ反省もしない。大間」が、地球上の生物の中で一番愚かではないかと。日本の731部隊と同様、公然と囚人を使って人体実験も行われ、植民地政策「戦争」という名の下では、正義も真理も人道も何も通用しない。そして、根深い 優生思想」が、戦争の引き金にも、正当化にも、残虐さにもなることに震撼する。

「人間の尊厳について考える機会に」
理不尽なことに黙らない「尊厳」を保つ戦いがあった

改めて「人間の尊厳」について、深く考える機会になりました。戦場のピアニスト」の中で、ゲットー（ワルシャワ市内でドイツがユダヤ人を閉じ込めた地域)内でさえ、少しずつ武器をため、抵抗した事実が描かれていました。理不尽なことには黙っていないという、大間としての尊厳」を保つ戦いが、必ずあったことに 大間」でいる誇りや勇気や希望を見出せます。

戦争につながりそうな動きがないか、優劣で人や物事を見る視点に左右されていないか、気づいているのに見過ごしていないか、問い直しを続けたいと思いました。